

『鯉』をどう読むか

裴 崢

目次：

- 1 中国人にとっての難しさ
- 2 これまでの作品論
- 3 国語教科書での扱い

井伏鱒二の作品『鯉』¹は、最初は1926年田中貢太郎編集の雑誌「桂月」に発表され、後に少し書き改められて28年に「三田文学」に載った。30年には『夜ふけと梅の花』という井伏の最初の短編集として、『山椒魚』、『屋根の上のサワン』などととも出版された。さらに85年、文章に若干の訂正がされ、『井伏鱒二自選全集』第1巻に収められた。

『鯉』は「日本人的な生活感情を」²持つ作品だと、河上徹太郎は言っている。小林秀雄は『鯉』を井伏の「傑作の一つだ」と次のように絶賛している。

この数頁の小品に、どんな挿話が、どんな事件が語られているかを、ここに書こうとすると、その全文を掲げなければ全く不可能な程、この小品は聊かな無駄もなく、緊密な文字でひとはけで書かれている。³

小林は、井伏文学の表現と構造について、次のように述べている。

彼の文章は決して平明でも素朴でもありません。大変複雑で、意識的に隅々まで構成されているものです。若い作家のうちでは、彼は文字の

1 井伏鱒二『山椒魚・遙拝隊長』（岩波文庫、1980年）。

2 河上徹太郎「解説」、井伏鱒二『山椒魚・遙拝隊長』（岩波文庫、1980年）、152ページ。

3 小林秀雄「井伏鱒二の作品について」、『文芸評論』上（筑摩書房、1974年）、118ページ。

布置に就いて最も心を労しているものの一人です。彼は文章に通達してをります。瑣細な言葉を光らせる術も、どぎつい色を量す術も、見事に体得しています。⁴

このような緊密な表現の連鎖を授業でよく読み取らせたい。

1 中国人にとっての難しさ

『鯉』のストーリーは次の通りである。

すでに数年前から（『井伏鱒二自選全集』以前では「十幾年前から」だった）「私」は、「一ぴきの鯉になやまされて来た」。鯉は友人青木が「満腔の厚意」からくれたもので、「私」はこれから「白色の鯉」を殺さないと友人に誓って、鯉を下宿の瓢箪池に放った。素人下宿に移ってから、そこに池がないので、むしろ鯉を「殺してしまっやろうか」とまで思った「私」は、友人の承諾を得て、鯉を友人の愛人が所有する広い泉水に入れた。鯉を彼の愛人に預けても、鯉の所有権は自分にある、という「私」の力説に対して、友人は初めて「疎ましい顔色をした」。

6年後、その友人がなくなった時、「私」は一刻も早く白色の鯉を彼の愛人の泉水から取り戻したくて、彼女に承諾を乞う手紙を出し、許可を得た。この時の両者の手紙は作品中に公開されている。「愛人の邸内に忍び込」んだ「私」は、一日かかって鯉を釣り上げた。この日、「私」は「池畔」に植えた枇杷の実も「無断で」たくさん食べてしまった。

「私」は鯉を早稲田大学のプールに放った。失職した「私」は、毎日プールへ見物に通い、学生たちの「巧妙な水泳ぶりに感心し」、ときどき「深い嘆息をもらした」。ある朝、「私」はプールに放った鯉を見ることができた。「私の白色の鯉」は、まるで王者のように多くの小魚を従えて、「与へられただけのプールの広さを巧みにひろびろと扱ひわけて」、ゆうゆうと泳いでいた。「私」

4 小林秀雄「井伏鱒二の作品について」、『文芸評論』上（筑摩書店、1974年）、118ページ。

は感動して「涙を流し」た。

やがて冬が来、プールには氷が張って「すでに鯉の姿をさがすこと」ができなくなった。「私」は長い竹竿で氷の表面に「長さ三間以上も」ある魚を描いて、その後ろに鱗や目や口のない小魚を書き加えた。「これは私の白色の鯉」だと思って、「私はすっかり満足した」。

この作品は、82年中国語に翻訳され、日本語研究の雑誌『日語学習と研究』⁵（『日本語学習と研究』）に発表された。しかし、教材としては、ほとんど使用されていない。表現が明快で、主語述語がはっきりしている『鯉』の翻訳は、中国人にとって、それほど難しくない。しかし、授業で取り上げるとなると、表現には隠されている部分も多くて、解明は容易ではない。このため、教材としては避けられているのではないだろうか。

右遠俊郎が述べているように、

読み手が自分の理解したものを確かめようとして一步踏み込むと、作品は一步退き、急に全景が曖昧模糊とした様相を帯びてくる。⁶

私が『鯉』を素材に修士論文を書いた時、北大教育学部と文学部の中国人留学生（7人、男1、女6）と教育学部の日本人大学院生（12人、男9、女3）の協力で、作品を読んだ感想を聞いた。

中国人留学生には『鯉』が好きだという人もいるし、嫌いだという人もいるが、読みやすいのに、中身としては分かりにくいという意見が多かった。日本人学生は、面白いと言いながらも、疑問を続出させた。中国人学生と日本人学生の反応の相違を示しておく。

1 登場人物について

△ 友人に対して、「愛人」は「私」の「恋敵」だろう。（中国人）

5 井伏鱒二原作「鯉」、森紀子・趙平・邢衛訳注、『日語学習と研究』（『日本語学習と研究』、北京對外貿易大学出版社、1982年3期）、64～68ページ。

6 右遠俊郎『こどもの目大人の目—児童文学を読む』（青木書店、1984年）、235ページ。

- △ 鯉と恋の音の関連もあって、友人の「愛人」に対して、「私」は恋心があったのではないか。手紙の中で「愛人」が「魚だけはお釣り下さいまし」というのも、鯉だけを釣って、私を釣らないで下さいという意味ではないか。(日本人)

2 表現のイメージと構成について

- △ なぜ「白色の鯉」を繰り返しているのか。くどいと感じる。(中国人)
- △ 単なる事実として、鯉は「白い」のだと描いているように思うが、ちょっと気になる。(日本人)
- △ 所有権の力説はどうして追従になるのか。(中国人)
- △ 手紙の役割は？(中国人)
- △ 枇杷の場面は面白いが、設定の意味がピンと来ない。(中国人)
- △ 折角プールの素晴らしい光景を描いたのに、水上の鯉の段落は蛇足ではないか。(中国人)

中国人と日本人の着眼点ははっきりと違っている。イメージ語や仕掛けなどについて、日本人はあまり問題にしなかった。必ずしも作品の内容をすべて読み取っているとは言えないが、その文化の中に育って来たためだろうか、気には止めていない。しかし、中国人にとっては難問が多い。

作品の中では次のような描写がある。のみならず土間には幾つもの靴と共に、青木の愛人が常々はいてゐた可憐な女靴が急ぎ足に脱いであったので、私はシャボテンの鉢を小縁の上に置いて帰って来た。

「可憐」という言葉はそのまま中国語にもあり、現在かわいそうという意味だ。このくだりについて、中国人には、青木に対する愛人の悲しみを生き生きと描き出すために、「可憐」という言葉が使われている、と受け止められている。また同時に中国人は、「可憐」という表現から、「私」が青木の愛人に抱く感情を窺うことができる、としている。

しかし日本語の「可憐」という言葉にはかわいそうという意味はまったくない。可愛らしいという意味になっている。日本人は、この修飾語から青木の愛人に対する「私」の気持ちを窺えるというよりも、こんなに悲しい時な

のに、友人の愛人の靴を可愛らしいと見た「私」の思いを、かなり複雑なものとして読み取っている。

日本人は、この作品から、「私」と青木との友情を読み取るだけでなく、「私」が青木の愛人に寄せる微妙な心の動きに惹かれるのだ。一方中国人は、「私」と青木の友情に注目し、愛人への「私」の思いも、青木を失った愛人の悲しみへの同情として理解する。このため、それぞれの反応ははっきりと異なっている。中国人は青木を「恋敵」だとか、氷上の鯉を「蛇足」ととらえて、すぐ結論めいた読み方をするのに対して、日本人は「さあ、どう読めばよいのだろうか」という姿勢で、にわかに結論を出すのではなく、その状況をじっくりと味わおうとする。両国人の間には、この作品を巡って、このように、微妙な差異があり、大きな難しい問題を投げ掛けている。

2 これまでの作品論

『鯉』に関するいくつかの作品論を以下のように要約してみた。

(1) 「鯉」? — 長谷川泉

長谷川泉は、近代名作鑑賞の素材として、『鯉』を取り上げた際、「僅かに三人である」登場人物を巡って、解釈を行った。「『私』は、作者自身の姿を揺曳する」。では作者の「美しい友情が流露している作品『鯉』の重要な登場人物、実在の青木南八は、どんな人であったか」という疑問を氏は提起し、それを「作品『鯉』を理解する前提として、この実在の人物を」追求した。

つづいて氏は、「私」と青木南八と「いささか趣を異にする」その愛人の3人を分析する。「作者井伏のフィクションであった」この少女は、「あたかも影の人の如く、表面にはその容姿をすら、あらわしはしないのである。しかもなお、南八の愛人は可憐な少女であった」と指摘している。

これらの分析を踏まえて、氏は「この三人は、南八を枢軸として美しい愛

7 長谷川泉「鯉—近代名作鑑賞(9)—」、『解釈と鑑賞』(第23巻9号、至文堂、1958年9月)、141~145、155~162ページ。

情で結び付けられて」おり、『鯉』は、親友青木南八への思慕の情にひたされた作品である。……井伏の青春の憂鬱な心象風景と、亡き親友青木南八に寄せる思慕と幻想が、一匹の白い鯉としてあざやかに浮かび上がって来よう。と述べている。

(2) 「井伏鱒二の作品について」⁸——小林秀雄

小林秀雄は、『鯉』は井伏の傑作の一つと激賞した上、鯉に託された作者の気持ち、また作品全体のムードについて、次のような感想を発表している。

彼は『鯉』で自分の夢を語るに際して、決して術なんぞ使用してをりません。彼は率直に心を表現してをります。彼の心は感傷的ではない。……彼はもっと深い味はひのある、もっと肉体的な生々しい心を持っています。……『鯉』で語られた一種の生理的哀愁は、彼の全作に流れてをります。……彼はこの生物が自分の心の哀愁の象徴である事を、率直に確信していると私は考へます。確信している時、現実は一ぴきの白い鯉に外なりません。

(3) 「井伏鱒二作 鯉」⁹——加藤典洋

『群像』(88年5月)の「私の好きな短編」において、加藤典洋は『鯉』における青木南八の「満腔の厚意」のしるしである鯉を大切にしたい「私」の気持ちと、「鯉は水中に生きる」べき「厄介な」存在との思うようにならないじれったい関係を目を付けている。「私」と鯉のあいだに、藻で覆う「ニウムの鍋」、木や竹の屑が散らばっている「下宿の瓢箪池」、青木の愛人宅の泉水、早稲田大学のプール、薄雪が降った冬のプールの底を泳いでいる鯉とのあいだに、つねに「水と氷と、薄雪」が介在する事態をとらえて、氏は次のように結論をしている。

鯉と「私」のあいだを、水、あの透明で入れ物がないとすぐに流れ失

8 小林秀雄「井伏鱒二の作品について」、『文芸評論』上(筑摩書房、1974年)、117～120ページ。

9 加藤典洋「井伏鱒二作鯉」、『群像』(1985年5月)、438ページ。

せてしまうものが隔てています。この短編は、こうして、かけがえもなく彼に大切なものと、彼との、それを直接手にしようとするそれが死んでしまう、というような、あるもどかしい関係の上に成立します。

(4) 「首尾不照応のいい素材」¹⁰ — 亀井秀雄

88年6月18日、北海道大学文学部亀井秀雄教授が、国語科教育法の講義で『鯉』について論じ、次のように語っている。

冒頭の一行——語りの方向づけ、内容の予告（なぜ、どんなふうに、「十幾年前から……なやまされて来た」のか）をしていながら、結末では、プールの鯉に感動、描いた絵に満足したと書いて、しかしまだ6～7年のいきさつしか語っていないし、「なやまされて来た」云々に照応した結びにはなっていない。¹¹ 首尾不照応——一種のはぐらかし（ナンセンス）を見せている作品として、デビュー当時、ナンセンス文学の代表作家とみられた井伏の特徴をよく示しているだけでなく、改めて細部の表現の意味（センス）を見出そうとする、読者の積極的な読みを誘発する点で、学生に教えるいい素材になる。

氏はさらに次のように授業している。

「私」が鯉の所有権を主張した時、青木が「疎ましい顔色」を見せたのは何故だったのだろうか。「私」の「彼に対しての追従だと思ったらしい」と「私」はとらえたが、このとらえ方には一種のずらしが含まれている。このずらしは、「私」と青木、「私」と彼の愛人との関係意識のぼかし（臆化し）に繋がる。作品はこの3人の微妙な関係をぼかしたまま、氷の上に鯉を描くという「私」の感動と満足に収束されていく。

10 亀井秀雄，88年6月18日，北海道大学文学部国語講義プリント（言葉を繋げるため少々整理した）。

11 85年，その自選全集では、「十幾年前から」が「数年前から」に訂正された。このことによって、「十幾年前から……なやまされて来た」と6～7年の経緯しか語っていないこととの食い違いが解消されている。

以上の4作品論は、『鯉』を読む上で多くの示唆を含んでいる。

長谷川泉は、『鯉』を亡き親友青木への追悼文として読んでいる。

小林秀雄は、『鯉』の世界に流れる哀愁を取り上げている。

加藤典洋は、「私」と鯉がなにかによって隔てられているもどかしさに注目している。

亀井秀雄は、青木の「疎ましい顔色」に着目して、「ずらし」の表現を評価している。

これらの論考は、それぞれ違う視点から、作品のテーマを簡単明瞭に表現しない日本文学の特徴を意識した上で、複雑微妙な『鯉』の内面に光を当てている。

3 国語教科書での扱い

93年出版の高等学校国語『新編現代文』（東京書籍）の中に、『鯉』が採用されている。教師用指導資料には作者のこと、語句の読み取り、鑑賞などについて書かれている。その中で、問題とすべき点は次の4点である。

(1) 単純な主題の理解

その主題は

- ・亡き友人に寄せる〈私〉の深い愛情と若い日の悲哀。
- ・今は亡き親友が〈私〉に残していった一匹の鯉、そして、その友人への深い思いが〈私〉に描かせたところの氷上の鯉の〈絵〉は、〈私〉の孤独と屈託を慰め、〈私〉を満足させる。¹²

となっている。作品の豊かな世界をきちんと理解していくべきだが、「主題」としてこのように抽象化すると、作品の独自の魅力が消えて、貧弱になってしまう。主題の設定は、『鯉』の内容をより深く理解するためのものとはならず、むしろ支障となるのではないか。無理に一般化、抽象化せず、表現にも

12「教材の研究 鯉」（「指導資料」1）、『新編現代文』[新訂版]（東京書籍、1993年）、44ページ。

とづいて、作品を味わい、考え、自由に意見を交換すべきだ。

教材のねらいについては、次のように書かれている。

昨今ともすれば見失われがちな「友情」というものの美しさ、あるいはそういうものによって、苛酷な現実を相手にし、それを乗り越えていくこともあるという人生の真実、それを確認することが、本教材の意図であり、価値ということにある。¹³

修身的な読みに陥っている。作品から恣意的に教訓を汲み取らせるのではなく、作品そのものを読ませたい。

(2) 具体性を欠く指導過程

教材の分析は素晴らしいが、それをいかに教え、生徒にどう納得させるかという指導過程は具体性がない。

『鯉』では最初、「のみならず立派な靴が幾つも脱いであったので」が、のちに「幾つもの靴とともに、青木の愛人が常々はいてゐる可憐な女靴が急ぎ足に脱いであったので」

と書き改められている。指導資料では、この改変を取上げ、その効果について、次のように書いている。

青木の〈愛人〉の魅力までもが浮かんでくる表現。〈常々はいていた〉とあるから、〈私〉は既に〈愛人〉を見知っていたことになる。この改変によって、青木の死はより哀切なものとなる。¹⁴

プールと氷上の表現効果について、次のように分析している。

(両者の)印象はかなり違う、――夏のプールを広々と〈王者のごとく〉泳ぐ姿への〈感動〉は、どちらかといえば晴々とした、素直で素朴なそれである。それに対し(氷上の)結末は、いわばずっと凝ったものとなっている。氷上の鯉の絵とは見事な着想であるが、季節はもう一度冬へ循

13 「教材の研究 鯉」(『指導資料』1), 『新編現代文』[新訂版](東京書籍, 1993年), 39 ページ。

14 同上, 50 ページ。

環し、〈私〉は再び絶望し、〈断念〉する。そしてもう一度訪れる〈満足〉。〈私〉の心が描かせた氷上の〈白色の鯉〉は、生きた鯉に比べてより深々とした友人への思いを語るものとなり、神聖な何かを感じさせるものとする。 (中略) 遙かに複雑な印象を与える。¹⁵

こうした分析は、表現と構造を手掛かりに、作品の豊かな内容を適切にとらえていると思う。指導過程には、当然このような重要な表現に気づかせることが課題とならなければならないのに、こうした分析を授業で明確にする具体的な進め方については、不十分といえる。素晴らしい分析を生徒に納得させる授業の進め方をもっと詳しく、きちんと伝えるべきだろう。

きわめて具体的に書かれている、「語句や漢字の学習はしっかりさせ」、「漢字テストを行う」¹⁶ ことなどは、『鯉』を理解する上で意味はない。単語としての言語の知識、あるいは漢字能力をここで取り上げると、生徒はいわゆる知識を覚えるのに追われてしまい、作品中の表現としての働きを十分理解することができなくなるのではないか。漢字の書き取りなどは表現効果の味わいとは別に扱われるべきだ。

(3) 不明確な授業展開

「学習の中で必ず触れ、考えさせたい項目」として、次の三つが〔学習の手引き〕¹⁷ に取り上げられている。

- 一 この小説を四つの部分に分け、それぞれの内容をまとめてみよう。
- 二 次の1, 2についてまとめてみよう。
 - 1 冒頭に「すでに数年前から私は一匹の鯉になやまされてきた」とあるが、なぜ悩まされてきたのか。
 - 2 結末に「私はすっかり満足した」とあるが、なぜ満足したのか。

15 「教材の研究 鯉」(「指導資料」1), 『新編現代文』[新訂版](東京書籍, 1993年), 56 ページ。

16 同上, 40 ページ。

17 同上, 53~54 ページ。

三 次の1, 2について, ユーモラスに感じられる点や, 着想の優れている点などを指摘して, 表現の特色を話し合ってみよう。

- 1 私は鯉を池に放つ前に, たといこの魚は彼の愛人の所有にかかる池に棲ませたにしても, 魚の所有権は必ず私のほうにあることを力説した。
- 2 のみならず私の鯉の後ろには, 幾匹もの鮒と幾十匹もの鰩と目高とが後れまいとつきまといて, 私の所有にかかる鯉をどんなに偉く見せたかもしれなかったのだ。

「一」は, 「作品の構成, 流れを大きくつかまえ, 「主題の理解の助けともなる」問いとされている。内容をまとめさせることは, ストーリーの確認にはなるが, これだけの設問では四つの部分, いわばプロットの相互の絡みの理解には達することができない。作品の構成をつかまえきれない恐れがある。

「二」は, 「冒頭と結末部の対応をおさえ, 主題を正確に読み取らせるための問題である」。「なぜ悩まされてきたのか, 「なぜ満足したのか」の聞き方は, 単純なようで, 漠然としすぎて, 答えにくい。これでは答えようとする意欲を引き起こすことができない。表現の微妙なニュアンスや魅力に注目し, 考えを深めていくような設問が望ましい。

「三」は, 討論によって, 表現のおもしろさ, 表現の特色に気付かせる授業活動である。「<たといこの魚は……力説した> という文のおもしろさはどんなところにあるか」というような問いが設定されている。表現にもとづいて, 生徒の話し合いを通して, 表現の効果を味わわせることは大切である。しかし, こうした設問では, 課題が漠然としていて, 生徒にとっては, 答えようがない。おもしろいかどうかと思うのは主観的なことだ。結果的にはそのおもしろさに気づかせるのだが, 設問としてそのまま聞くと, おもしろさ自体がなくなる恐れもある。表現の必然性に十分注目させるような設問を工夫する必要があると思う。

(4) 不適切な削除

もうひとつ気になったのは, 教材が結末の部分で「彼等は鱗がなかったり,

目や口のないものさへあった。」というくだりを省略してしまっている点だ。

原文は「けれど鮒や目高たちのいかに愚かで惨めに見えたことか！彼等は鱻がなかったり、目や口のないものさへあった。私はすっかり満足した」となっていたが、「指導上の配慮により」、「彼等は鱻がなかったり、目や口のないものさへあった」という「途中の一文」¹⁸省略された。しかし、このように鮒や目高たちの「愚かで惨め」な具体的な描写がなくなると、「長さ三間以上もあろうという」「私の白色の鯉」との対照がぼやけ、「私」の切ない「満足」は弱くなってしまふ。差別表現であるため、トラブルを起こすことを心配するぐらいならば、『鯉』を採用しない方がいい。省略されたかたちでは、作品を十分に読み取ることはできない。

以上の検討を踏まえて、言葉や表現の仕掛けから構造に迫っていく作品分析を行い、指導案を作成する。

18 「教材の研究 鯉」（「指導資料」1），『新編現代文』[新訂版]（東京書籍，1993年），44 ページ。